特別企画

「Hakumon ちゅうおう」学生記者有志主催講演会

経済学部OB　医学博士・東京大学大学院客員研究員　藤井輝明氏

『今を生きる～あなたは顔で差別をしますか～』

藤井輝明さんは、昭和57年に中央大学経済学部を卒業された本学OBで、卒業後、猛勉強して医学博士、看護師の資格を取得され、現在は東京大学大学院客員研究員として活躍されています。

2歳のとき、海綿状血管腫を発症し、顔にできた大きなアザで人々の好奇の目にさらされ、偏見によるいじめや差別に苦しめられました。ご自身は「容貌障害」と呼び、顔に病気や傷のある人たちを、見た目でいじめたり、差別、蔑視したりしないように、全国の学校をまわって、「タッチしてごらん。ハグしてごらん」と実際にアザに触れてもらうことで、偏見をなくし、「容貌障害」を知って、理解してもらう活動を行っています。

『この顔でよかった』（ダイヤモンド社）、『笑う顔には福来る』（NHK出版）など多数の著書があり、8月に『あなたは顔で差別をしますか「容貌障害」と闘った50年』（講談社）を出版されたのを機に、講演をお願いしました。

（11月19日、Cスクエア中ホールで）

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました藤井輝明です。今日は本当に夕方で忙しいときに集まっていただいて、ありがとうございます。

今日はいろいろなお話をしようと思ってやってきたのですが、中央大学の卒業生が50万人だそうです。いろいろなＯＢがいろいろな分野で活躍しております。私もそういう卒業生の１人ですけれども、こういう卒業生もいるんだということで、ひとつ気楽に聞いていただくといいなと思っております。

リラックスして聞いていただければいいんですが、話す内容はなかなか重たい内容でございますよ。「ええっ、そんなこと、藤井さん、あったの？」という内容なんですけれども、そういう重たくて、つらくて、悲しいお話を明るくさわやかに語っていこうと思っております。

開会の挨拶をする学生記者代表

■全国2万人の海綿状血管腫患者■

ご覧のようなキャラクターでございまして、右の顔面が膨れ上がっておりますので、怖い、汚い、うざったい、そして凶暴な人間、凶悪犯というようなこともずいぶん言われてきたんですが、まあ、実際に会って話すと、とてもかわいらしいというようなこともよく言われます。質実にして、こつこつと努力をしていく、藤井もそういう中央のすばらしい伝統である質実にして剛健というスタンスはずっと守り続けていきたいなと思っております。

さて、前置きが長くなっておりますけれども、ぱっと見ていただいて、右のところの顔が、先ほど言いましたように膨れ上がっています。「あれ？　藤井さん、何で右の顔が膨れているんですか、腫れているんですか」とよく聞かれます。これは今日の皆さんの資料にお配りしてあるように海綿状血管腫という病気でございます。

この病気の名前を初めて聞いたという方も大勢いらっしゃるのではないかと思います。「海面状血管腫、何ですか、その病気の理由、原因は？」とよく聞かれます。実はこの私と同じ病気の患者さんが、全国に２万人ぐらいおります。中央大学の多摩キャンパスで勉強している学生さんが２万３０００から４０００人ぐらいと伺いましたので、その学生さんよりやや少ないくらいの人数の患者さんがいるんですね。

「でも藤井さん、藤井さんのように顔が膨れて腫れている人を見たことはないですよ。初めて見ましたよ」と言われます。これは無理もないんですね。この海綿状血管腫という病気ですが、私のこの顔のように、２万人の患者さんのうち半分以上が首から上、つまり顔に症状が出てきます。血管が膨れるんですけれども、他にお腹に出てきたり、背中に出てきたり、それから手とか足とか、いろいろなところに出てまいります。

■突き刺すような視線■

顔に症状が出てまいりますと、町を歩いていますとね、「何だ、あの膨れ上がった表情、顔をしているやつは、気持ち悪いな」ということを言わ

れた体験を、この病気の患者さんはみんな持っています。『突き刺すような視線』と呼んでいるんですが、「何だ、何だ、あの、何か膨れ上がった、あの顔したやつは」というようなことを言われてつらいものですから、実は家の外に出てこないで引きこもっている人が非常に多いんです。

みんなから後ろ指を指されて、つらい視線を投げかけられたくない。そういう思いが強いですから、家に引きこもっているので、こういう病気の患者さんがいるということがまだ知られておりません。

海綿状血管腫もそうですし、世の中には難しい病気がたくさんあります。まだ少数派として認知もされていない病気の当事者、いろいろなハンディキャップを抱えておられる方が大勢いらっしゃいます。私の場合には海綿状血管腫ですけれども、こんな病気になって本当に運が悪い、もうつらい、苦しい、もう人に会うのは嫌だ。そういう思いをしながら、生きている人たちが大勢いるということもまた21世紀の今の現実でございます。

■心ないデマにつらい思い■

でも、そういう当事者が今、前を向いて、堂々と社会に出て発言をしていく、そういう21世紀になってまいりました。私もこの海綿状血管腫のことを、大学生のときからもそうなんですが、30年以上、いろいろなところで訴えてきました。

オバケ、気持ち悪い、こう言われてつらいので、別にうつる病気ではありません。感染する病気でもありません。この海綿状血管腫というのは、一言で言いますと、私の場合は目と頬と唇の皮膚の下の血液が流れる道、血管の壁が膨れているだけでございます。

ですから、怖い病気でも、うつる病気でも、感染する病気でもないし、遺伝する病気でもないんです。けれども、藤井に近づくと、あの顔の膨れているのがうつる。もし藤井の頬っぺたに間違って触ったりすると、触った人の指先が溶けてくる、腐ってくる。だから、近づくな。こういうデマをずいぶん流されて、つらい思いをしてまいりました。

ですから、小中高校、さらに保育園、幼稚園へ行って、いろいろな人たちがいていいんだ。この社会には病気だって個性であって、そういう人たちが一緒に暮らせる社会を築かなければいけない。それは小さいときから徹底して子供たちに教えていくことが大事であるということで、校長先生、教頭先生のところへ行って、30年前、お願いしました。

■子供たちに話を！拒否した小学校長■

これ、ある小学校で実際にあった話なんですが、30年前ですね。「どうか、交流授業で、生徒さんたちに話をさせてください」とお願いしたときに、校長、教頭からこう言われました。

「藤井さん。藤井さんが小学校へ来てね、1年生、2年生に藤井さんが自分の体験を話すとしよう。1年生、2年生は藤井さんの顔や表情とかを見て、みんな怖がって恐ろしがって、なかにはびっくりして口からあぶくを吐いて、そして倒れてしまう。そういう児童がいるかもしれない。藤井さん、もしね、子供たちがそのようにびっくりして卒倒してね、大変な状況になったら、あなたはどう責任を取るつもりか。結果的に責任を取らされるのは私たち、校長、教頭である。だから、藤井さんが学校へ来て話をするなんていうことは、私たちが生きているうちはまずない。いや、おそらくずっとないだろう。悪いけれども、とっとと帰ってください」

こういうことを言われましてね。いや、本当に悲しかったですね。いろいろなメッセージを伝えることも非常に難しかったという時代があるんです。

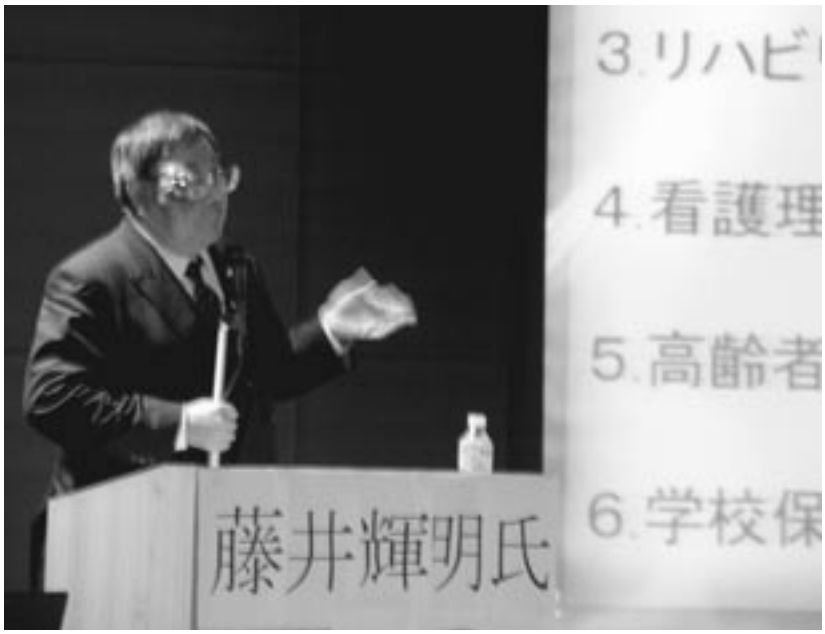
■温泉入浴も「だめ、だめだ」と■

同じ病気の友達も同じような体験を持っているんですけれども。たとえば日本は火山立国です。全国、北海道から九州まで温泉がありますね。日

本人はみな、温泉が大好きでございます。私も温泉に入るのが大好きでございます。

私はこれまで熊本大学の医学部の教授を6年間、それから鳥取大学の医学部の教授も丸々3年間、それから岐阜の医療大学だとか、長野県、信州の飯田の女子大学であるとか、いろいろな大学で学生さんたちに自分の体験のメッセージと、それから専門の保健医療の話をしているんですが、その赴任したところは名だたる温泉が学校のすぐ隣にあるようなところでございます。

温泉が大好きで、いろいろな温泉に入りに行くのが趣味でもあるんですが、かつてこう言われたことがあります。「温泉に入ることはできません」と。これも本当にあった話です。場所は言いませんけれども、お風呂に入りたいと言って、温泉に入場しようとすると、温泉の入口、男の湯の入口のところで、必ずストップと言われるわけです。どういうことかというと—。



藤井さんは医学博士で看護師の資格ももつ

■保健所の証明書求められる■

「あなたのような、膨れた腫れた顔の人は当温泉では入ることができません。あなたの、その膨れた顔、やばい病気じゃないんですか。ここは大勢の人たちが入る温泉なので、あなたのようなやばい病気の人は、温泉に入ることはできない。だめですよ。あとで保健所から注意を受けて、そして温泉が営業停止になったりすると、私たちが被害を受けるんだ。だから、帰った、帰った。何？うつる病気じゃないって？」

私が一生懸命説明するわけですね。そうすると、「だめだ、だめだ」と言うんです。温泉の経営者の方、管理人さんですね。「もし、藤井さん、あなたが温泉に入って、その膨らみが感染しないというんだったら、この温泉のふもとに保健所があるから、そこへ行って、うつらないという証明書をもらってきてほしい」と、こういうことも言われたことがあります。

保健所へ行って証明書をもらうといっても、そんなもの、保健所だって、いきなり来られて困るわけです。しかもご丁寧に、嫌がらせですよ。温泉の管理人さんがこう言うんですね。「藤井さん、もしね、証明書をもらってきたとしても、今日、即断即決で返答はできないので、後日、郵送にて、温泉に入浴できるかどうか、返事をさしあげます」と、こういうことを言うわけです。

たまたま観光で行っている温泉地域でした。ですから、もうその日のうちに帰ってきます。またあとで何日かたって、その温泉地に行くなんていうのは大変なことですよね。ですから、事実上の拒絶、拒否ということでございます。

■「国内拉致にあった」ハンセン病患者■

こういう話もずっとしてきたのですが、最初はまともに受け取られなかったです。「えっ？　藤

井さん、嘘でしょう？　温泉に入れないなんて、そんなことがあるわけない、日本の国で」と、こういうことをメディアの人たち、マスコミの人たちも言っていたんです。

だけれども、実際に病気の人たちで、温泉に入れない、拒絶をされたという人たちが現われて、大きな問題になりました。九州の熊本で。熊本では水俣病もあります。

ハンセン病といいまして、昔、らい病と呼ばれていましたが、このらい病と呼ばれることが病気の当事者にとってはとてもつらい。なぜつらいかといいますとね、私と同じような膨らみ、目のところが膨らんでいたり、それから鼻のところが曲がっていたり、唇が垂れ下がっていたり、ハンセン病の場合には耳たぶが溶けたように落ちていたり、崩れていたり、それから手と足の指の欠損があったりしまして、欠けているということですね。

その見た目の異様さから、「かつて国内拉致に遭ったんですよ」と、彼らが話すように突然、警察がやってきて、ハンセン病の患者さんを連れていって、国立療養所という名の隔離施設、全国に13カ所あります。東村山市にも多摩全生園というハンセン病の元患者さんの施設があります。全員治っています。60年も前に薬がありました。薬が開発されていて治る病気だったにもかかわらず、差別、偏見、蔑視が非常に残っているわけですね。

■拒まれたハンセン病患者の入浴■

熊本県にも国立療養所、菊池恵楓園というハンセン病の元患者さんの施設があります。いろいろな大学で教えていたときに、その菊池恵楓園の患者さんの代表の方から私のところに手紙がきました。1通の手紙です。それがまた大きく人生を変えることになりました。

「ぜひ藤井さん、九州の熊本へ来て、地域を回ってほしい。地域の偏見、蔑視が非常に根強いものがあって、施設の外へ出るのも大変だ」と。海綿状血管腫の私たちの仲間が町の中に出るのも大変というのと同じ状況です。

その恵楓園の人たちが、1泊2日の温泉旅行を楽しみにしたら、温泉のホテルが、そういう方々の宿泊と入浴を拒否したという事件がありまして、大きな問題になりました。メディアの方々も、「藤井さんの言っていたことはやっぱり本当だったんですね」ということで、「だから、言ったじゃないの」ということも言ったわけです。

小中学生のとき、いじめとか、いろいろとあったりしたことも含めれば、まさしく50年ですね。言い続けてきましたけれども、ようやく、「うん、それだったら、藤井さんの言うことを聞いてやろうじゃないか」と、そういう機運が高まってまいりました。

温泉に入るのも大変だったということが事実としてあるんだということも知っておいてほしいです。

■金田昌司ゼミで産業立地論学ぶ■

私も中央大学の経済学部で一生懸命勉強いたしました。私のときは産業経済学科という学科が経済学部にありました。私の指導教授は金田昌司教授といいまして、片腕なんですね。事故によって手首がないという方です。左手首ですね。中央大学に入学したときに、その金田教授から大学のなかで声をかけられました。経済学部棟7号館でございますね。

金田教授が何を研究されているか、よくわからなかったのだけれども、「よかったら来ないか」と誘われて、1年の教養ゼミナールからお世話になりました。産業立地論ですね。どういうところに企業とか工業団地とか、学校とか博物館とか、いろいろなものを建てたらいいかということを、今で言うと費用、コストですね。ベネフィット・コスト分析なんていうのがいま大変流行っていますけれども、そういったようなことを含めて、ゼミで授業するということでございます。

地域へ出て、実際に中小企業団地であるとか、地場産業とか、を調べて歩くということをゼミでやっておりました。将来はそういう勉強をしたこ

とを生かせる分野ということで、銀行とか信用金庫、信用組合がいいんじゃないかなと思いました。

■顔を理由に採用拒否した銀行■

銀行へ行こうと思って4年のときに会社訪問いたしました。そのときにも企業の面接でこう言われました。「藤井さんのように顔が膨れ上がっているオバケみたいな人は、銀行業界ではまず雇えない」。

当時の学長は商法の戸田修三先生でしたけれども、戸田先生の学長推薦状ももらえるくらい、実は成績も、自慢しているわけじゃないですけれども、よかったのです。学長先生の推薦状を持って、4年のときに銀行訪問いたしました。50行、銀行を回りましたけれども、すべて顔のことを言われましたですね。

「藤井さん、よく考えてくれよ。藤井さんのように膨れ上がった顔をした人が、銀行に採用されたとしよう。まずそういうことは万に一つもないけれども」と、そこだけをやたらと強調していましたね。いやらしいですね。

「お客さんが来て、藤井さんのような膨れ上がった人を見て、みんなびっくりしてしまう。何だ、この銀行は、お客さんに対する嫌がらせか。こんなバケモノをカウンターに座らせておくなんて。そんなことでお客さんが怒りだしたりしたら、銀行としても立場がない。藤井さん、申し訳ないけれども、ご縁がなかったと思って諦めてくれ。なお、藤井さん、決して偏見、蔑視、差別をしているつもりは毛頭ないから、そこは誤解しないでくれよ」

誤解しないでと、何回も強調しておっしゃっておられましたが、これは間違いなく、偏見、蔑視、差別、誹謗、中傷そのものでございます。

講演中は熱心にメモをとる聴講者が多くみられた

■「しっかりやって」が普通の人情■

確かに私の顔を見ると、皆さん、びっくりしない人はいないと言ってもいいでしょう。びっくりするのはごく自然な反応です。けれども、びっくりしたからといって、「何だ、このバケモノは。もうこんなやつと、今日は出会って気色悪い。もう本当にバケモノ、とっととうせろ」と、こう思うかどうかは全く別の問題です。

普通はですね、「あら、あんなに顔が膨れて腫れていて、つらい思いとか、悲しい思いもずいぶんしただろうな。病気かな、事故かな。そういうことと闘っているんだろうな。いろいろなことでもって、病気と立ち向かっている。ぜひ、しっかりやってほしいな」と、こう思うのが人情でしょう。

実はいろいろな病気やハンディキャップを負っている人たちが経済的な自立をする、就職をするというのも大変な問題でございます。私自身も、「藤井さん、膨れた顔の人なんか雇うところはどこもないから」ということを言われて、涙を流し

た経験がやっぱりあるわけです。

唯一、経済学部のゼミの先輩が就職しておりました山一証券ですね。ここだけから内定を取ることができました。しかし、山一証券も日本の不動産バブルのときに結局、つぶれましたよね。ゼミの先輩もその後、たいへんな苦労をされておりますけれども、でも、実力の中央ですね。今、立派に金融関係にトラバーユいたしまして、先輩は元気に活躍されておられます。そういうふうに就職でも大変苦労をしました。

■障害者雇用率守れない教育現場■

それともう一つです。教育の問題、学校の先生でございます。我が国には学校の正規の先生方が小中高校で１００万人以上いるんです。巨大な職場ですよ。１００万人の学校の先生はほとんど公務員でございますからね。公立学校ですね。私立の学校を含めれば、小中高校の先生はもっと多いです。

この学校の教育現場も、身体的に障害のある人を２％雇わなければいけないという法律があるのです。身体障害者雇用促進法という法律です。実は教育の現場はこの２％、正規雇用の教員のうちハンディキャップのある人を雇わなければいけないということが、ほとんど守られておりません。守られているのは、大阪、京都、奈良、和歌山といった関西だけでございまして、首都圏など惨憺たるものでございますよ。

そして、学校の教育現場では何と教えているか。車いすの生徒さん、松葉杖の人、目の不自由な生徒さん、耳が不自由な生徒さん、難しい病気あるいは精神的に大変な生徒さんがいたら、そういう人たちをいじめずに、一緒に励まして勉強していきましょうと、教育現場では教えております。

ところが本音と建前が全く違うというのが日本の社会の特徴でございまして、そう言っている教育の現場が、先生方の職場が、教育委員会が、そういうハンディキャップのある人を雇わない。これが現実でございますよ。

■なぜ就職できない？死のうと！■

私は、全国の地方自治体47都道府県を５巡６巡しております。講演会の回数も１０００回ですが、官公庁、都道府県庁とか教育の現場が多いですね。どこへ行っても必ず中央大学の卒業生が活躍しておられます。とてもうれしいことだと思っていますね。

皆さんの中にも公務員を目指される方もいらっしゃるのではないでしょうかね。中央は地方公務員は多いですものね。それから学校の先生も多いです。さっき講演会の回数１０００回と話したのは学校関係だけでも１０００校ぐらいやっています。そのうち、小学校は５００校ですけれども、各学校に必ず中央出身の先生がおります。

「あれ？　小学校の教員免許は取れないはずだけれども」と思うのですが、中央の卒業生は努力しておりまして、卒業してから明星大学であるとか、玉川大学であるとか、それから佛教大学で小学校の教員免許なども取っています。

私は経済学部を卒業して、なぜ医学博士なんだということですが、そこもちょっと話しておきますと、結局、銀行業界はそういう差別、偏見、蔑視に遭ってご縁がなかったのですが、そのときはショックでしたね。中央大学でも一生懸命勉強して、社会科や商業科の教員免許も取りました。土曜日、いつも文学部棟の３号館で教職の授業を聴いておりました。

そういう勉強をして、いろいろなことをやったのに、なぜ就職がうまくいかないのかなと思ってつらかったですね。そのときはね、もう死のうと思ったこともありました。だけど、死にきれなかったのは理由があります。

■「藤井にしかできない職業がある」■

大学４年のとき、支えてくれたゼミナールのメンバーでございますよ。ゼミの先輩や同級生、それから後輩ですね。それから、金田教授をはじめとして、経済学部の先生方、就職部長さんですね。

そういった方々が、「藤井さん、藤井さんには必ず、藤井さんにしかできない職業というのがあるから、辛抱強く、粘り強く、こつこつ努力をして、生きていこう」ということを言い続けてくれました。応援しているということですね。

自尊心や自己肯定感情はどんな人にもあるのだけれども、自分はだめじゃない、とすべての人は思いたいのだけれども、そういう自尊心や自己肯定感情をくじくのは、心ない一言です。

「もう、あんなバケモノに何ができるか」「あんなオバケは前世で悪いことをやったから、その呪い、報いが今の世の中に現れてきているんだ」

こういうことも言われてきました。前世の呪い、悪魔のたたり、病気に対する偏見、蔑視というのは今も地方へ行きますと、根強いわけです。

■正しい知識、情報を学ぼう■

偏見、蔑視、差別が、なぜ起こるか。一つには、起こる理由ですけれども、正しい知識、正しい情報をしっかり学ぼうとしない、そういう姿勢から、差別、偏見、蔑視は起こると言い切っています。ですから、正しい知識、情報を勉強するために、私たちは学んでいるということですね。

その学んでいるということは、うわさとかデマをまともに信じて、友達や仲間や、いろいろな病気で苦しんでいる人たちへの偏見、蔑視、そしてデマを流したりすることがないように、正しい知識、情報を勉強しているんだ、ということですね。

しっかりした事実を学ぼうとしない。そういう姿勢があるから、偏見、蔑視、排除、排斥、こういう問題が起こるわけでございます。

いろいろな差別、偏見、蔑視が起こるのは、ほとんどがデマですね。そういう意味では大学へ来て、勉強しているのはいったい何のためかということです。学ぶ意味、意義ということも、日々、毎日、夜寝る前でもいいですから、ちょっと振り返りながら、床に就くということも、私は大事ではないかと思っておりまして、勉強する意味や意義を問い続けていこうということでございます。

■運命変えた講演会と出会い■

さて、就職ができませんでした。ふてくされておりました。大学4年のときですね。たまたま地域で医療関係の講演会がありました。

私の父親と母親は東京都の病院局の職員をしておりました。おやじは東京都の地方公務員、私の母親は看護師、保健師、助産師、養護教諭、学校の保健室の先生でして、東京都の職員でございました。この東京都は今も中央の出身者が多いです。局長・部長級職以上の3人に1人、4人に1人ぐらいは中央の出身者だと思います。

それで、医療関係の話題というのが家族の共通の話題でした。一緒にみんなで講演会を聴きに行きまして、そのことが私の運命を大きく変えました。

今日も皆さん、こうやって講演会に足を運んでいただきまして、ありがとうございます。自ら進んで足を運んでいく。そこでご縁ができます。ですから、足を運んでいくということはとてもいいことでございます。

そこで足を運んだ講演会の講師の方が、その当時の海綿状血管腫の手術の第一人者と言われている方でございました。整形外科、形成外科でございますね。お医者さんで、メディカルドクターですね。医学博士の河野稔博士という方でした。その方との運命の出会いがありました。

■足を運んでこそ、できる貴重な勉強■

ぜひ皆さん、こまめにいろいろなところに足を運んで、現地・現場主義です。いろいろな人たちの話を聞きましょう。それは病気で苦しんだり、いろいろな問題でもって大変な思いをしている人たちの話もそうです。それから、私は実は箱根駅伝を強くする会の会員でもありますし、公式野球部を強くする会の会員でもございます。皆さん、神宮球場にも足を運びましょう。

あれ、何か、これ、学友会の回し者みたいでございますが、スタンドにいろいろなOBが来てお

りますよ。そういう方々に語りかけていただきますと、いろいろな分野で活躍しているＯＢが神宮球場に来ております。そういうＯＢの方との触れ合いということも、また貴重な社会勉強だというふうに思っていますよ、また話がそれましたので、元へ戻します。

■誘われ医学研究所へパートで就職■

それで、救急救命法の講演会でしたけど、河野先生が講演が終わったあとで、壇上から降りてきて、「君、その顔の膨らみ、その病気なんだけど、それは君、どのくらいわかっているんだ」と語りかけてきましたね。河野理事長先生、もう亡くなられておりますけれども、いろいろと私の話を聞いてくれました。

やがて、その河野先生が理事長を務めている研究所に誘われて、最初はパートで就職しました。河野先生が講演会のときに、「もし行くところがなかったら、自分のところで」と、河野先生が理事長を務めている国の公益法人ですね。「君をパートで雇うからね。もしどうしても困ったら来なさい」と勧めてもらったのです。

この公益法人がまた中央大学の卒業生がめちゃくちゃ多いのです。河野臨床医学研究所でございますが、理事のうち3人が中央大学の卒業生でございまして、そこでもかわいがってもらいましたね。ありがいたいです。

最初はパートで入ったんですけれども、3年後に正規雇用の職員になることができました。中央大学、感謝、感謝です。そういうつながりですね。人とのつながりです。

■「身を犠牲にしても働くのがエリート」■

事務で入ったんですけれども、そこで医学関係の大学の先生、それに研究所がありましたので、先生方の論文の清書だとか、研究学会発表のグラフ作りなどをやりました。河野理事長先生が、「君は、2万人の同じ病気の人たちのために働くことができるじゃないか。藤井君。病気とか、いろいろなハンディキャップで苦しんだり、悩んだり、悲しい思いをして落ち込んでいる、そして発言したくても発言するすべがない、そういう人たちのために、自分自身の身が、たとえ犠牲になってでも働くのが本当のエリートだ」と言ってくれたのです。

その当時、１９８０年代でしたけれども、河野理事長先生は「今の時代は、藤井君、エリートの意味を履き違えている人が大勢いる」ということを言っていましたね。

自分の身が犠牲になるなんていうようなことは、もちろんまだ、体験はありません。ただし、今も迫害、誹謗、中傷というのはかなりあります。

「藤井さんが気の毒だと思っていたから、応援してやっていたけれども、あんたみたいなバケモノが偉そうなことを言うんだったら、もう一切知らない。これからおまえのことを叩くし、足で蹴飛ばすから、そう思え」

こういうような電話だとか、手紙なんかもしょっちゅうきます。でも、前へ前へと歩く。それが中央スピリットですよ。

■言葉でなく行動みてわかる、人の生き様■

今の時代の評価を気にする必要はない。50年後、１００年後、評価は５００年、１０００年後でもいいと思っています。けれども、今、いろいろ泣いている人たちのために、今、行動を起こさなかったならば、１００年後、２００年後、３００年後はないというふうに思っています。

そして、ここが重要です。その人の考えていること、思っていること、どのようなキャラクター、人柄なのかということは、必ずその人の行動、実践に表れてきます。ここが重要です。その人が言っていることが本当か、嘘かは、その人がどのように行動しているかを、しっかり見ていくことによって、その人の生き様がわかります。

今年は世界人権宣言が国際連合で採択されて60周年の記念にあたりまして、全国でいろいろなイベントが行われています。人権の世紀、時代とい

うことを藤井が言わせてもらうならば、すべての人がその人なりの輝き、その人なりにこういうふうに生活したいという思いがすべて認められて尊重される時代が、人権の世紀、時代であると言い切っています。

■28歳ではじめた医療、医学の勉強■

28歳のとき、お世話になった河野先生の研究所を出て、進学をいたしまして、医療や医学を勉強し直しました。そして30歳を過ぎてから医学博士の学位を、国立大学法人名古屋大学の大学院博士課程で博士号を医学分野でいただきました。

いろいろな意味で、不思議なご縁、中央大学の卒業生やいろいろな関係者の方々の支援を得ました。いろいろなOBがいていいし、いろいろな病気の当事者が世の中にいていいし、そういう人たちの意見が、今、尊重される。輝け、個性の時代です。

どんな活動もどんな行動も考えてみれば、最初はたった1人から始まっています。私も考えてみれば、学校、小学校へ行って話したい。直談判で何度行っても断られてきましたけれども、でも、必ずそれを超えていける。諦めないということが非常に大事ですね。

「藤井さんは容貌障害という言葉を言ってるけど、身体障害者の法律には、容貌障害という言葉は載っていない。あなた、法律に載っていないようなことを容貌障害だというのはとんでもないことだ。もう、そういうことは撤回しなさい」

こうも言われてきました。しかし、生活のしづらさとか、不便さとかがあるのも事実でございます。

優しく、分かりやすく語り掛ける藤井さん

■未来につながる最初の一人になる勇気を■

始めた1人はいろいろなことも言われて蹴飛ばされるのだけれども、その理念と方向性さえ間違っていなければ、理解の輪は必ず世の中に広まっていくということが言えます。

「1人が何ができるんだ。藤井さんや藤井さんの友達、仲間たち、せいぜい十数人で顔のことを訴えて、見た目のことを訴えていたって、世界は67億人もいるじゃないか。しょせん、焼け石に水だよ。あんた、無駄なことやってるね。徒労に終わるよ」ということも言われました。でも、それは人間の可能性というか、そういうことを信じられない人の言うたわごとでございますよ。

いや、1人の人間からやれることがあります。いえいえ、1人、その人にしかできないことがやっぱりありますよ。そういう1人の可能性、実践、行動というものが、前へ前へ行動していく、前進していく。

評価ということは、将来、先でいい、とさっきも言いましたけれども、やはり今、始めていくということが未来につながってく。その最初の1人になっていくということも勇気だろうというふうに思っています。

■急がば回れで、絶対に諦めない■

卒業してから事務で公益法人の医学研究所へ入りました。28歳でもう1回勉強して、医療関係の大学へ行って、大学院の修士、それから博士課程へ行って、博士号を取りました。気がついてみると、回り道をしているようで、急がば回れですよ。40歳のときに国立大学の医学部の教授になっておりました。熊本大学で医学部の教授です。人生とはそういうものです。

ですから、皆さんも今、一生懸命勉強していま す。夢に向かってチャレンジしていると思います。やりたいことがだめであっても、絶対に諦めないことです。28歳でもう1回医療の分野へ一から勉強し直しても、中央大学で勉強した非常にグローバルな視点とか、社会で起きている現象はすべてのものがつながっているんだ。

そして、そういう泣いている人たちの立場を守り、擁護、発展していくのに法律の知識が必要であり、政策科学が必要であり、経済の知識だって必要だ。商学部でやる損益計算書、貸借対照表の見方だって大切ですよ。

■学ぶこと全部が人生につながる■

今、自分は関係ないと思わずに、中央大学にいるときに学べるもの、取れる資格は全部取っておきましょう。今、役に立たない、自分自身の将来のことと関係ないと思っているかもしれないけれども、全部、それは皆さんの人生につながってきます。ぜひぜひウイングを広げていただいて、いろいろな授業にも顔を出していただくということですね。学部を超えて、ほかの学部にもどんどん足を運んでいただきたいと、こう思っているわけでございます。

皆さんも質問をしたいなと思っている方もいらっしゃると思うので、ここで講演会の第1部は終わりまして、講演会の第2部はクエスチョン・アンド・アンサー大会でございます。質問とかですね。何でもいいですよ。

《質　疑　応　答》

――経済学部3年です。1000回ぐらい講演をなさったそうですが、1回目に講演をなされたときのお客さんの反応がどのようなものだったのでしょうか。2点目ですが、講演をされてきたなかで、少しずつでも社会に何かしらの変化が与えられたのであれば、その具体例を教えていただければと思います。

藤井　いやあ、いい質問です。質問がなかったらお話しようかと思っていたことを質問してくださいました。ありがとうございます。

第1回目の講演会ですけれども、これはね、実は小学校2年生の生徒さんにお話をしたのです。もう忘れもしません。東村山市の小学校です。

■「一緒に遊ぼうよ」と小学2年生■

2年生ですよ。私は大学の医学部でその当時教えていました。しかし、小学校2年生にどういうふうに教えたらいいかわからない。まあ、堅苦しい医療関係の通り一遍の話をしたら、2年生の男の子が、「はーい」と手を挙げて、こういうことを言ってくれました。「テルちゃん」、藤井輝明なので、テルちゃんですよ。「テルちゃん」、次の一言、衝撃的ですよ。

「テルちゃん、もう、そんな堅苦しい話はやめよう」と、こう言ったんですね。そして、「ぼくたちと一緒に遊ぼうよ、テルちゃん」と言ってくれましたね。

最初はね、こちらも「えっ？」と思いましたし、校長先生、教頭先生、担任の先生も、真っ青な表情でございましたね。今でも忘れません。「あら、藤井先生に何て失礼なことを」と、こう思ったんだろうなと思うんですけれども、私にとっては救いでした。

いやぁ、堅苦しい話をやって、こっちも嫌だなと思っていたので、「もうそんな話、しなくていいよ。一緒に遊ぼうよ」と言ってくれたことは救

いだったですね。それで、「よし、遊ぼうか」と言ったら、子供たちのほうが上手でしたね。ちゃんとコマとかスライムとか、いろいろな遊び道具をもう用意していました。何、最初から、私の話なんて聞くつもりはなかったですね。一緒に遊ぼうと。

■「友達だったら何でも聞いてね」■

だけどね、ここは大事ですよ。確かに椅子に座って、机に向かって、話を聞くというようなことも教育効果がないわけではない。だけれども、一緒に遊んで交流をすることによって、テルちゃんはこういう人間なんだということを学ぶという、そっちの学びは大きいと思っていまして、現代の教育で、そこのところが抜け落ちている点だろうなと思っています。

それから、ここが一番話したかったところです。その生徒さんと10分ぐらい遊んでいたら、こう言ってくれたんです。「テルちゃんね、今日からもう友達なんだ。ぼくとね、テルちゃんは」と、2年生の男の子がそう言うんですね。「友達の言うことはね、テルちゃん、何でも聞くものだよ。これから友達だからいいよね。嫌だと言わないよね」と、そこを強調するんです。

作戦がうまいですね。思わず、「うん。友達だから、何でも、ぼくでできることがあったらね、何でもやるよ」と言ったらね、「うん、そうか。テルちゃん、その言葉、忘れるな」と、こうですね。そして、次の一言ですよ。

■「頬っぺたにタッチしていい？」■

「テルちゃん、あのね、お願いなんだけど、テルちゃんの頬っぺたにちょっとタッチしていいかな。その膨れている、腫れている顔、どんな具合だか、触ってみたいんだけど」

私がちょっと動揺した表情を浮かべたら、その2年生の男の子がすぐに、「おれは友達だから、さっき友達のお願いはね、何でも聞くよって言ったよね」と言って、涼しい顔をしているわけですね。

これはしまったなと思ったけれども、まあ、そのときは約束だからということでタッチしてもらったわけです。嫌われるかなと思ったんですね。そうしたら、「テルちゃんの顔はね、とっても温かくて、ぼくの大好きな大福まんじゅうみたいだ」と言ってくれたんですね。大福まんじゅうです。これかと思いましたね。

そして、その男の子が触った後、クラスの男の子、女の子の生徒さんが、「ぼくも、私も触りたい」「タッチングしたい」ということで、「いいでしょう、いいでしょう」ということで、ずらり行列ができました。それでタッチング交流会というのが始まりました。

《NHKのドキュメンタリー映画をスクリーンに映しながら》

NHKテレビで昨年、ドキュンメンタリー映画が30分流されました、私の番組でございます。（映像が流されるスクリーンを見ながら）音声が出てこないので、ここで説明します。

これは小学校1年生のお子さんです。こうやっ

NHK『タッチ先生』のビデオを映しながら講演する藤井さん

て、「ぼく、テルちゃんですよ」と。さあ、ひきつけを起こして卒倒を起こす生徒さんがいるかどうか。

■話聞くうちに表情変わる小学生■

「藤井さんってどんな人だろう」って、みんな、ちょっと表情が、ふーんというような感じです。「藤井ですよ。テルアキで、ニックネームはテルちゃんです」なんて、言っているわけですね。このへんはアイスブレーキングという心理学の用語ですけれどもね。みんなのちょっと緊張した雰囲気を解きほぐしているわけです。

それでいろいろと話しているわけです。いじめられた体験。小学校でね、いじめグループが10人ぐらいいて追いかけてきて、「やーい、オバケは学校に来るな」って話をしているんです。「みんな、そういういじめなんかしちゃだめだよね」ということを訴えているところです。

みんな、だんだん真剣な表情になってきましたですね。「うん、うん」なんて、うなずきながら聞いてくれています。「そういう病気の人たちもいるから、みんなと仲良くしていこうね」と言って、みんなが「うん」と。そうかというようなことで吸い込まれるように、時々うなずきながら聞いているわけです。最初の「何だろう、この人は」という表情と微妙に違ってきているのがおわかりでございますね。

■『百聞は一触にしかず』■

そして「みんな、もっと親しくなろうね。握手したりしてね、間近で質問してもオーケーだよ。ふれあい交流会やろうね」と言ったら、小学校の1年生、すぐこうやって質問をしてくるわけですよ。「そんなに膨れた腫れた顔でね、生徒さんから気持ち悪いと言われたことはないんですか」と、1年生の女の子が聞いてくるわけですね。

それで、もう本当に総立ち状態になっておりますね。みんな、こうやって一緒にね、握手しながら、それから、こうやってタッチするわけですね。

そうなんです。体感、体得です。別に怖い膨らみでもなければ、うつる病気でもない。醜い吹き出物でもない。みんな、なでなでしております。そうです。かつて藤井輝明や藤井の家族を苦しめた病気が、今、子供たちにとっては人間理解の学習教材になっているわけですよね。

ぼくの頬っぺたにタッチして触れた人たちは、いろいろな意味で大変な、身体的にも大変な人たちとか、そういう人たちに出会ったとしても、必ずこの藤井との出会いを思い出してくれるだろうと思っております。

『百聞は一見にしかず』と言いますけれども、『百聞は』、一つに触れると書いて『一触にしかず』と言っています。

■意識高い人たち中心に理解広げる■

自分はオバケではない。自分の話を聞いてもらえる人たちがいる。そういうことがわかると自尊心、自己肯定感情が上がってきます。これがものすごく大事ですね。1人で地域に出るのは大変。ならば、藤井もそういう講演会の会場に足を運んで、一緒にやりましょうと、全国の当事者や仲間たち、あるいは難しい病気の患者さんたちにも呼びかけているところです。

宣伝はしておりません。意識が高い人たちを中心に広めていくのが一番、急がば回れで確実な方法だというふうに思っています。

客寄せパンダでね、いろいろ飛びついてくるようなところは結果的に、あとで「もう、おまえなんか叩いてやる。おい、藤井、おれたちの言うことを聞かないんだったら、おまえなんか、もう蹴飛ばして、踏みつぶす」なんていうようなことを言ってくる。そういう人たちもいるわけでございまして、理解者を通じて、少しずつ動きを広めていくということでございます。

２０００年、偏見、差別、蔑視が続いたのであれば、２０００年かけて、偏見、差別、蔑視をなくしてくくらいの息の長い、粘り強い実践や活動が大事であるというふうに思っております。

■一人で悩まず、OBの活用を■

――法学部の2年生です。自分は涙を流す人を救うために、中大の法学部に入学をしたんですが、実際入ってみると結構不安だらけで、いろいろ悩みを抱えているんです。今日のお話を聞いて、おかげさまで自分も前向きにがんばろうと思うようになったので、その感謝を述べたくて。

藤井　いろいろな道があるので、1人で悩んでいないで、OB会を活用しましょうね。非常に母校愛に燃えているOBが大勢おりまして、創立125周年で50億円集めたんですよ。みんなで、私もお金出しましたけれども、そういう気前のいいOBも大勢います。

さっき言ったように、あせる必要はありません。本当にこう言っています。50ぐらいまでは自分自身に投資をしようと。いろいろなことを勉強していい。あせる必要はない。必ず中央の出身者であれば必要とされる時代がきます。ファイト、ファイトです。応援しておりますからね。

――経済学部の2年生です。人と交流するのが苦手で、どうすればいいかなと思っているんです。どうすれば、先ほどのビデオの子供のように素直に人と交流できるのか、教えてもらいたくて質問しました。

学生記者から花束の贈呈

■誰にもあるチャームポイント■

藤井　まず言えることはですね、すべての人に、その人にしかない魅力とか、チャームポイントとか、があります。だけれども、自分自身が一番気づいてないんだよね。

私自身も中央に入ってよかったなと思うのは、ゼミの先輩や同期、それにさっき言った金田昌司先生が、「藤井君は笑顔がとってもかわいくて、素敵だ。でも笑顔が素敵ということに気づいていないんじゃないか」と言ってくれて。

友達は結構、無責任なことを言っていたように思ったのだけれども、街で歩いて、確かにこにこ笑顔であいさつすると、向こうからもやっぱり笑顔で返してくれるという人が多かったですね。「ふん、何だ、こいつ」というふうに思われたというか、態度を取られたことはほとんどないですね。

すべての人にその人にしかない魅力やチャームポイントがあります。それを、ゼミの友達とかクラスの友達に言って、「自分のいいところって、自分で見えないんだけれども、どこがいいと思う？」と聞いてみるといいですよ。そうすると、あなたの魅力、チャームポイントに気づくと思いますよ。やってみてください。

司会　藤井さん、今日は大変ありがとうございました。最後に「Hakumonちゅうおう」の学生記者より、ご講演のお礼を込めて、花束をさしあげたいと思います。

藤井　どうもありがとうございます。わざわざ買いに行っていただいてね、すみませんでした。ああ、うれしいです。どうもどうも。ありがとうございます。（拍手）

講演会聴講者の感想

藤井輝明氏の講演を聴かれた方々から、以下の感想をいただきました。

最初は写真をみて、少し怖いかもしれないと思ったのですが、実際にお話を聞いてみると、優しそうな方で、すごく印象が変わりました。直接話を聞いてみるって大切なのだと改めて感じました。藤井さんの「前へ前へ」という言葉には大いに勇気づけられました。自分も諦めず、前へ前へ進んでいきたいと思います。

（法4・女）

❖ ― ❖ ― ❖

藤井さんは、話し方がとても明るくて、話が聞きやすくて良いなと思いました。海綿状血管腫という顔が腫れる大変な病気で、就職などで大変な苦労をなさっているにもかかわらず、藤井さんは明るく前向きに、障害への偏見をなくすために活動なさっていて素晴らしいと思いました。

藤井さんは「正しい知識を学ぼうとしないことが差別につながる」とおっしゃっていて、その通りだと思いました。人は、知らないと勝手に自分の思考の枠にはまってしまい、差別をしていないつもりでも、差別をしてしまうことがあると思います。ですので、「自分は差別をしていないだろうか」と自分の行動を振り返ったり、障害に関してさまざまな知識を学んでいきたいです。

（法2・女）

❖ ― ❖ ― ❖

中学生のとき藤井さんの著書『運命の顔』を読み、とても感動しました。藤井さんのステキな笑顔と優しい語り口がとても印象的でした。（商1）

❖ ― ❖ ― ❖

正しい知識、情報を学ぼうとしないから差別や偏見が生まれる、と藤井さんがおっしゃってくださった言葉がとても印象的でした。だからこそ〝学ぶ意義〟を大切にしていこうと思います。

（総政1・女）

❖ ― ❖ ― ❖

自分も差別に関する活動をしているので非常に参考になりました。理論より現場の話が多かったのが良かった。実際に現場で活躍している中大OBの話を聞くことが出来て、とても勇気づけられた。このようなポジティブな話を聞くことでやる気やモチベーションにもつながる。今後も中大OB・OGの講演会があるといいなと思います。

（総政2）

❖ ― ❖ ― ❖

前向きに生きることが大切だと学びました。自分もコンプレックスを持っているし、誰でもそうだと思います。だけど自分のいい点に自信を持って生きていくことが大切なんだと実感しました。

（文3）

❖ ― ❖ ― ❖

藤井さんのように障害がありながら、それでもなお人と接することを恐れず、常に笑顔で、むしろ周りの人達のために頑張っている姿に感動しました。自分も恐れず、もっと人と交流していけるようにしたいです。

（経済2・男）

❖ ― ❖ ― ❖

子供達に接する藤井さんの大変暖かな接し方と、ご自身の病や障害に対する偏見をなくしてゆくための活動に力を注がれるお姿に感動致しました。このような素晴らしいOBのいる中央大学の学生であることを光栄に思いました。

（法3・女）

❖ ― ❖ ― ❖

自分にもある差別の心を恥じた。どんな人とも、話し合えば、分かりあえることに確信を持った。自分にできることはあるはず、と日々生きている藤井さんの生き方に感動した。

（法4・男）

❖ ― ❖ ― ❖

私の弟も障害があり、まわりから心無いことを言われ、つらい思いをしたことがありました。藤井さんの知ってもらおうという活動が、本当に世の中に必要だと思い感動しまし

た。

（法3・女）

❖ ― ❖ ― ❖

差別や偏見はどうしてなくならないのか。それは知識不足からだとおっしゃられていたことがとても心に響きました。今まで何を学んでいたのでしょうか。もっと教えなければいけないこと、学ばなければならないことがたくさんあると思いました。

（法4・男）

講演する藤井さん

❖ ― ❖ ― ❖

今の日本の中に実際に存在しているホンネとタテマエの恐ろしさを感じさせられました。最も印象に残ったお話は、知識、情報を得ようとすることが差別・偏見の対極であるというお話でした。私自身、知識のいたらなさにより、人を不快にさせているところもあるのかもしれません。常に正しい知識と情報を求め続け、自分の人格を高め続けながら生きていきたいと思いました。

（総政4・男）

❖ ― ❖ ― ❖

とても優しい喋り方で、私に話しかけてくれているようで、すぐに藤井さんの話に飲み込まれてしまいました。そんな優しい人柄からは想像できない誹謗、中傷にさらされた人生を歩んできていることが分かりました。

こんなに魅力を持った人をどうして差別するのだろうかと疑問に持ちました。それは藤井さんがおっしゃっていたようにその人、その病気について正しい知識、情報がないからなのです。きっと藤井さんの講演会を聞けば、私のように恐さなど全くなくなり、逆に素敵な面を見つけられると思いました。

（総政1・女）

◇

「なぜ差別は起こるのか？」ということに対する藤井さんの答えは心に残りました。私自身、様々なことに対する正しい知識や情報が少ないので、それらを日々勉強し、世の中のことを理解していきたいと思います。様々な“違い”を認識し、誰もが苦しむことなく生きていける世の中になってほしいです。（法4・女）

❖ ― ❖ ― ❖

熱い人生論を聞き、視野が広がった気がします。アクティブになりたいと思えるようになりました。

（法4・女）

❖ ― ❖ ― ❖

藤井様が苦労されてここまでこられたこと、また中央大に誇りをもたれていることが大変伝わった。また、積極的に発信していくことの大事さも知った。

（文4・男）

❖ ― ❖ ― ❖

いかに“正しい知識”が大切であるかあらためて感じさせられました。また、現代日本において人権教育が足りないように思いました。

（法5・女）

❖ ― ❖ ― ❖

たとえ一人でも声を上げなくてはいけないんだな、と思いました。

（文2・男）

❖ ― ❖ ― ❖

私も幼い頃は悪意はなかったけれど、友達をからかい、友達からからかわれて、その一言でどれほど人を傷つけ、自分が傷ついていたのかを思い出した。見た目ではなく、精神的に大人になっていきたいと改めて思った。

また、狭い視野で世の中を見たくないと思った。見た目でしか人を見れない人は、愚かでかわいそうな人だと思う。そのような人に私はなり

たくないです。忘れていた大事なことを学びました。（法1・女）

❁ ― ❁ ― ❁

前へ前へと向く姿勢に感動しました。その状況に負けず、自分と同じような病気の人達のために、周りからの批判や中傷を受けながらも、思いを伝えようという勇気に、自分も何か行動しなければいけないという気持ちになりました。（経済2・男）

❁ ― ❁

学ぶことの大切さがわかりました。（法2・男）

❁ ― ❁

辛い経験、苦しい経験をしたにも関わらず、少しも世間や社会を恨んでいる様子もなく、明るく講演されている様子に感銘しました。軽い気持ちできた講演会でしたが、とてもいい刺激になりました。（法4・女）

❁ ― ❁ ― ❁

「ハンデ・コンプレックスのある人間は、それをバネにして頑張れる」という俗説がありますが、藤井さんはその見本だと思いました。20代後半から医学を学び始め、医学博士まで取得するというのは、大変な努力を重ねたと思います。偏見・差別に屈せず、ご自身を成長させる姿は尊敬しました。（法3・男）

❁ ― ❁ ― ❁

初めて容貌障害というものを知りました。その問題に限らず種々の差別について、私にとって考えさせられるテーマでもあり、非常にためになる時間になりました。（法3・女）

❁ ― ❁ ― ❁

自分の視野が広がった気がする。障害を持った方に対する偏見、差別は障害者の存在がだんだん知られてきている世の中でも、やっぱり消えないのかと思う。しかし、藤井さんのお話を聞いてもらいたいと思ったと同時に、もっと障害者の方のお話を聞く人が増えたら、偏見、差別を持つ人々が少しずつ減るのではないかなとも思った。（法2・女）

❁ ― ❁ ― ❁

中央大学出身ということで、とても親しみやすかったです。藤井さんが経験してきたことは、藤井さんにしかわからないものかもしれませんが、私はよかったと思います。どうしても客観的にしかとらえることができませんが、こうやって足を運ぶことが大事だと考えました。（法2・女）

❁ ― ❁ ― ❁

藤井さんは障害をかかえながらも、前向きで人間として魅力的だなと思った。藤井さんは人をいかにひきつけるかということを考えて、講演していると思った。血管がはれているだけど聞いて、見方が変わった。とらえ方しだいだと思った。（法2・女）

❁ ― ❁ ― ❁

自分は差別・偏見をもたれたり、されたりした経験がないから、つらい思いをしたことがないから、藤井さんのお話にはある意味いろんな思

聴講者からは多数の感想が寄せられた

いもあるだろうと思った。周りのフォローや頑張ろうと思えるポジティブな性格がきっと壁を壊して、外に羽ばたけたのだと思う。自分も命をかけて他人のために頑張りたいと思う。（法2・男）

❖ ― ❖ ― ❖

小学2年生との交流のお話には思わず涙がでそうになった。少数派、たった一人だとしても何かを変えることができる。人に伝えることができるのだと勇気をいただくことができた。（総政1・女）

❖ ― ❖ ― ❖

就職や温泉のお話には、今でもそういうことを言う人が本当にいるのかという驚きとともに、悲しくなったというのが正直な感想だ。子供達は、偏見なく接する。いつから人はおかしなレンズを通して人を見るようになってしまうのか、疑問であり、深く考えてみようと思うところだ。講演の始めに、私が話すのは、重く、辛く、悲しい話だ。この話をさわやかに話していこうと思うと前置きをされていたのが印象的だった。（総政1・男）

❖ ― ❖ ― ❖

「バケモノ」など人にからかわれても自らのスタイルを貫く藤井さんのお話を聞いて、自身ももっとしっかりしなければと思うようになりました。周りに流されずに生きていこうと思います。（法4・男）

❖ ― ❖ ― ❖

自らの障害を「自分にしかない個性」ととらえ、自らの体験を語ることは「自分にしかできないこと」であるという藤井さんの生き方に元気をもらいました。（法3・女）

❖ ― ❖ ― ❖

非常に人生のためになりました。小さなことでくよくよしていた自分が恥ずかしいと思ったほど、藤井さんは元気だなと思いました。OBにこのようにすばらしい方がいて、後輩として誇りに思います。（経済3・男）

❖ ― ❖ ― ❖

現実に起きている差別がこれほど多くあるという事実に驚きました。人権とはなんなのか、真に考えさせられる2時間でした。それを気付かせてくれた藤井さんに感謝の気持ちで一杯です。（法3・男）

❖ ― ❖ ― ❖

つらい思いを数え切れないほどなさってるはずなのに、藤井さんは、全てを受け止めるような、本当の笑顔をなさっていました。あの笑顔は困難を乗り越える覚悟をたくさん積まれて、行動されたから、うまれたものなのかなと思いました。本当に強い人は、本当にやさしいというのは、本当だと藤井さんに出会って思いました。（総政3・女）

❖ ― ❖ ― ❖

藤井さんの明るく前向きな性格に感動しました。外見で判断しがちであるが、その人自身をよく知り、魅力を感じたいと思った。そして中央大学の人のつながりの深さを感じ感動した。（文2・女）

❖ ― ❖ ― ❖

藤井さんの持っている雰囲気、魅力にとてもひきこまれました。人よりも辛い経験をされてきた方のお言葉だったので、とても言葉に重みがあって、心に響きました。私も今24才で1年生です。遠回りしていますが、他人と比べずにがんばりたいです。（経済1・女）

❖ ― ❖ ― ❖

相手の気持ちになって物事を考えることが差別をなくすために有効ではないのかと思った。（総政1・男）

❖ ― ❖ ― ❖

とても信じられないことばかりでした。でも、そんな辛いことを明るく話していて、すごく器の大きい方だなと思いました。中央大学は「質実剛健」という言葉がとても印象に残っており、中央大学で勉強できていることが幸せだと思います。容貌障害に負けず立ち向かう姿、すごいと思います。（法1・女）

❖ ― ❖ ― ❖

辛い経験を明るく話されているのが印象的でした。このような経験をしても前向きに頑張っている姿に心打たれました。（文2・女）

❖ ― ❖ ― ❖

「偏見」というものは大人が作り上げるのだと強く思った。（法3・男）